

〔三十二番職人歌合〕一番 花左持

千〇秋〇萬〇歲〇法〇師〇

春の庭に千秋萬歲いはふより花の木のねはさしさかへなむ略中

左歌千秋萬歲の能作は、毎年正月の佳曲なれば諸職諸道の最初にいで、歌合の一番にす、
めり、まことに花木の春にあひて、さしさかへなん根元をいはへるは、あら興がりときこゆる、

略〇下

〔臥雲日伴録〕文安四年正月二日、一種乞食、革歲首、到人家歌祝言、世號之千秋萬歲、前后相逐來、各與

百錢出一緡以草鞋錢蓋舊例也予僧周鳳曰出一緡則不辭之分而與則非予所好住官寺院者問分而與

〔晴豐記〕天正十年正月四日、今日せんすうまんざいにまこう不申候、

〔貞丈雜記二品〕一萬歲とて、ゑぼし素襖著て、年の始に人の家に来りて、祝事をうたふ者、古よりあ

り、足利殿の營中には、正月七日参りし也、年中恒例記に、正月七日の部に云、千秋萬歲参ル略中

にしへは千秋萬歲といひけるを、後世は略して萬歲とばかり云也、萬歲のうたひ物の詞に、千秋

萬歲といふ事ありし故、如此名付たりとぞ、昔は三河國より出たると也、今は三河、尾張、遠江の三

ヶ國より出る也、土御門殿公家也、陰陽師の頭也より官位を申受る由也、

〔嬉遊笑覽五歌舞〕萬歲はもと千秋萬歲といふ略中、その唄諸處にて異なりとなむ、其内上がた小歌

絲の時雨などに萬歲あり、是は木造めけることは絶てなく、むねと商人の事をいへるは、ことに

いやしき萬歲になむ、その唱歌に、やまよめく、京の町の、やまよめうつたるものなにく、大鯛

小だひぶりの大うを、あはびさゝえはまぐりこく、云々、そこを打過そばたなみたれば、きんら

ん、どんす云々、此小歌、大麻、松の葉などにも載せざるは、いと近く小歌には作りたる歟、されど萬

歲がかゝることをうたへるは、久しきこと、見えて、寛永の發句帳に、萬歲樂まづうりぞめや京

の町、西武が獨吟百韻に、六百は堺の町のとりやりに蛤こんと賣やすみよし、自注に、萬歲樂に百